

科学技術コミュニケーションの理論と実践

授業科目名	科学技術コミュニケーションの理論と実践	単位数 2 単位
英語標記	Science and Technology Communication:Theory and Practice	
授業コード	360401	
受講人数	20 人（研究科を問わず、理工系・人文社会系を含む多くの研究科からの参加が望ましい）	
担当教員	小林 傳司、八木 絵香、平川 秀幸、春日 匠	
対象	全研究科大学院生	
開講時間等	集中講義（前期中、下記の指定日に実施）	
開講場所	豊中キャンパス：大学教育実践センターステューデントコモンズ マッチング型セミナー室	
キーワード	パブリックアクセプタンス、異分野間コミュニケーション、科学技術の社会的責任	
授業の目的	近年では脳死臓器移植をはじめとする生命技術や遺伝子組み換え技術、BSE 問題など多種多様な課題において、先端科学技術と社会の関係に円滑さを欠く事態となりつつある。これに対しては、国内では講演会の実施やわかりやすいパンフレットの作成等のいわゆる PA (Public Acceptance) 活動が行われてきたが、その有効性が限定的であり、「科学技術と社会の新たな関係構築」が必要であることが強く認識されつつある。 本演習では、研究の細分化により生じている専門家間のコミュニケーションの困難さを実感させることを目的とする。異なる研究科の学生による、自らの専門分野の紹介プレゼンテーション及び具体的な科学技術的テーマをめぐる相互討論を行う。また、実践経験を培うために、学生が主体的に企画／実践する科学技術コミュニケーションの場を設ける。	
講義内容	●1)5月12日・水曜日 6-7 限 入門講義および、「異分野間交流」の体験 科学技術コミュニケーションに関する入門講義のあと、「研究科混成」のグループによる自らの研究の紹介および質疑応答や、ファシリテーションスキルを身につけるための演習を行う。 ●2)5月22日・土曜日 10 時-17 時 演習の課題提示及びその課題の背景に関するグループディスカッションを行う。ディスカッションを通じて、課題となる科学技術と社会のかかわりについて理解し、具体的な議論手法を身につけることを目指す（この際、課題となる科学技術に関する専門知識は必須ではない）。 課題としては、現代社会において話題となっている、しかも社会とかかわりのある科学技術の具体事例にする予定である。 ●3)6月5日・土曜日 10 時-17 時 課題となる科学技術と社会のかかわりの複雑さや、これを把握する際の「フレーム」の多様性を理解するための討論を行う。その上で、2)のディスカッションを踏まえ、学生自らが、主体的科学技術コミュニケーションの場を企画する。 ●4)7月3日・土曜日 10 時-17 時 科学技術コミュニケーションの実践を行う。 ●5)7月7日・水曜日 6-7 限) 課題に関する総合討論を行い、振り返りと講評で終了する。 なお、受講者との調整で、授業日程を変更する可能性がある。	
教科書	なし	
参考書	小林傳司『トランス・サイエンスの時代』NTT 出版。その他は授業時に適宜紹介する。	
成績評価	出席と活動状況による。	

今、なぜ、科学技術コミュニケーションか

われわれは科学技術とともに生きることを選択した社会に暮らしている。現代生活において科学技術が果たす役割は大変大きいし、今後ともこのことは変わらないであろう。大学院に学ぶ学生はこのような科学技術に大きく依存した社会において、知的な専門性を持った人間として生きることになるはずである。このような人々が社会から信頼され、尊敬されるようになるには何が必要だろうか。この演習型講義では、これを考えてみたいのである。いや、考えるだけではなく、演習における活動を通じて体感してほしいのである。この演習型講義を通じて身に着けてほしいことは以下の四点である。

1. 専門分野が異なると、同じ対象や現象に関して異なる視点、発想、方法でアプローチしていることの理解（視点の多様性の理解）
2. 自らの専門性が備えている視点、発想、方法も、他分野のそれと同様に、多数ある「視点、発想、方法」の一つであることへの理解（異なる分野に対する謙虚さ）
3. 素人とされる人々も、この複雑な産業社会に生きており、その生活や経験を通じた「視点、発想、方法」をもっていることへの理解（これらは常に訂正され、教育されるべきものとは限らないことへの理解）
4. 「社会の中の科学技術」という視点の理解（科学技術の社会的責任）

そのために

○少人数で

この演習型講義では、参加者数は 20 人前後に限定している。じっくりと議論をしたり調査をしたりするためにはこのくらいの人数に限定する必要があるからである。

○多様な研究科から（文系の参加が重要）

この演習型講義では、上に述べたように、「異なる専門分野が、自らが専門としている対象に関して異なる視点、発想、方法でアプローチしていることへの理解」の獲得を重視している。だから、科学技術コミュニケーションといっても、理工系の大学院生だけで議論しては意味がない。理工系と人文社会科学系の大学院生が同席し、同じ課題について考え、議論することが重要なのである。これ自体が、教育における新しい「コミュニケーションデザイン」の試みなのである。

○テーマは現代の科学技術と社会のかかわり

この演習型講義では、現代社会において話題となっている、しかも社会とかかわりのある科学技術の具体事例をテーマにする予定である。こういったテーマの場合、どの研究科の大学院生も特権的な専門性を持つことができない。多かれ少なかれ、人文・社会・理工系のすべての知識や考察が動員されなければ、問題を把握することもできない。こういったテーマに、自分とは異なる専門性を持った大学院生と共同で取り組むことを通じて、「科学技術コミュニケーション」の重要性と難しさを理解してほしい。

〈過去のテーマ例〉

「BSE 事件に伴って生じたアメリカ産牛肉輸入停止を解除するための条件とは何か」

「原子力発電所から生じる高レベル放射性廃棄物の地層処分は是非について」

「地球温暖化問題に関する市民参加のあり方について」